

<履修モデル例①> 社会文化研究系

養成する人材 研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。）、グローバルに展開する企業、国際機関、社会人の学びなおし
※ 以下のモデル例は、世界と地域の一体的な創生に貢献する研究者のケース

博士論文題目「H. アーレントの「暴力論」からみるヘイト・スピーチの問題本質の解明」

3年次通年「研究指導」（研究指導科目）4単位

「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ、その成果を更に発展させていくなかで、博士（学術）の学位に相応しい論点、方法、分析、考察、論証を有した博士論文を作成し、ディプロマポリシーに定める「共生と多様性の理論の確立を目指す社会文化研究」を通して多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力を獲得する。

【研究指導チーム】

主指導教員：社会文化研究系（生の哲学）
副指導教員1：環海日本長崎学・アジア研究系（境界文化論）
副指導教員2：公共政策研究系（国際人権法）

2年次通年「研究演習Ⅱ」（演習科目）4単位

「研究演習Ⅰ」の成果を継承し、更に発展させていくなかで、主指導教員及び副指導教員からの指導を通じて、「多文化社会的状況」における「問題本質を見極める力」のなお一層の高度化を図りつつ、各自の研究を更に進めていく。

具体的には、「研究演習Ⅰ」と同様に(1)～(4)を行い、(5)研究成果を「研究成果報告書Ⅱ」にまとめて提出する。なお、学生の研究計画の見直し等により、研究テーマの変更が生じた場合は、適宜研究指導チーム体制の見直しを実施する。

【研究の概要】

ヘイト・スピーチ研究では、その問題の所在よりも対策ばかりが目されるが故に、かえって解決策をめぐる議論が硬直化している。法的・制度的観点からの問題解決に拘るのではなく、哲学・思想的観点からヘイト・スピーチを分析することによって、これまでの研究や議論で見落とされてきた部分を明らかにし、ヘイト・スピーチにおける問題の本質を明らかにする。

1年次通年「研究演習Ⅰ」（演習科目）4単位

「社会文化研究系」の観点から研究課題にアプローチし、主指導教員及び副指導教員の指導の下、21世紀の「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」を養うなかで、持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し、それに基づき研究を実施。

研究指導チームは、主指導教員と副指導教員2名の計3名からなり、副指導教員のうち少なくとも1名を「社会文化研究系」とは異なる系から選出することで、多文化社会学研究に相応しい学際性を担保。

具体的には、次の(1)～(5)の指導を行う。

- (1)研究指導チームの指導のもと、研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法を明確にしつつ、研究計画書を作成
- (2)研究計画に基づき、各自の研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法の深化に繰り返し取り組む
- (3)研究課題の遂行に必要な資料やデータの収集、分析、考察を行う
- (4)研究指導チームの教員に加えて、研究科に所属する他の教員や院生、国内外の包括連携機関の学外アドバイザーが参加する学年末の合同中間発表会で、研究計画及び進捗状況を報告し議論を行う
- (5)研究成果を「研究成果報告書Ⅰ」にまとめて提出する

1年次の「多文化社会学特論Ⅰ」及び「多文化社会学特論Ⅱ」において、俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」及び「問題解決に向けた多様な解を提示する力」について、高度に基盤的な力を修得する。

また、「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」及び「研究指導」において、社会文化研究系の方法論を学び、「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」を身につける。

具体的には、主指導教員は「暴力」に関するヨーロッパ近代思想について生の哲学の観点から指導を行い、副指導教員1はトランスナショナルリティの観点から境界文化についての指導を行い、副指導教員2はヘイト・スピーチに対するEUの法令、行政について国際人権法の観点から指導を行う。更に、市民活動・学校教育における取組についてライデン大学（学外アドバイザー）からの研究助言を得る。

1年次前期「多文化社会学特別演習Ⅰ」（演習科目）2単位

1年次後期「多文化社会学特別演習Ⅱ」（演習科目）2単位

俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、「社会文化研究系」、「言語研究系」及び「環海日本長崎学・アジア研究系」の研究領域を中心に、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」の基盤を形成するとともに、その枠組みにもとづき俯瞰的な観点から自身の専門分野における研究成果をまとめ、超域的な議論を実施することができる能力を身につける。

<履修モデル例②> 言語研究系

養成する人材 研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。）、グローバルに展開する企業、国際機関、社会人の学びなおし
※ 以下のモデル例は、社会人の学びなおし（現職教員）のケース

博士論文題目「コーパス分析を中心とした中間構文の使用域とその本質について」

3年次通年「研究指導」（研究指導科目）4単位

「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ、その成果を更に発展させていくなかで、博士（学術）の学位に相応しい論点、方法、分析、考察、論証を有した博士論文を作成し、ディプロマポリシーに定める「言語・非言語コミュニケーションを通した相互理解の原理的解決を目指す言語研究」を通して多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力を獲得する。

2年次通年「研究演習Ⅱ」（演習科目）4単位

「研究演習Ⅰ」の成果を継承し、更に発展させていくなかで、主指導教員及び副指導教員からの指導を通じて、「多文化社会的状況」における「問題本質を見極める力」のなお一層の高度化を図りつつ、各自の研究を更に進めていく。

具体的には、「研究演習Ⅰ」と同様に(1)～(4)を行い、(5)研究成果を「研究成果報告書Ⅱ」にまとめて提出する。なお、学生の研究計画の見直し等により、研究テーマの変更が生じた場合は、適宜研究指導チーム体制の見直しを実施する。

1年次通年「研究演習Ⅰ」（演習科目）4単位

「言語研究系」の観点から研究課題にアプローチし、主指導教員及び副指導教員の指導の下、21世紀の「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」を養うなかで、持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し、それに基づき研究を実施。

研究指導チームは、主指導教員と副指導教員2名の計3名からなり、副指導教員のうち少なくとも1名を「言語研究系」とは異なる系から選出することで、多文化社会学研究に相応しい学際性を担保。

具体的には、次の(1)～(5)の指導を行う。

- (1)研究指導チームの指導のもと、研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法を明確にしつつ、研究計画書を作成
- (2)研究計画に基づき、各自の研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法の深化に繰り返し取り組む
- (3)研究課題の遂行に必要な資料やデータの収集、分析、考察を行う
- (4)研究指導チームの教員に加えて、研究科に所属する他の教員や院生、国内外の包括連携機関の学外アドバイザーが参加する学年末の合同中間発表会で、研究計画及び進捗状況を報告し議論を行う
- (5)研究成果を「研究成果報告書Ⅰ」にまとめて提出する

【研究指導チーム】

主指導教員：言語研究系（英語学、応用言語学）

副指導教員1：言語研究系（語用論）

副指導教員2：社会文化研究系（社会言語学）

【研究の概要】

言語使用場面における意味の生成と理解を人間の言語能力の深層部分に求めると同時に、表層に反映された談話文やコミュニケーションパターンなどのコーパス分析を通して、言語及び言語コミュニケーションや非言語コミュニケーションの本質にせまる研究を行う。また、言語使用の場面と言語を使用する人々を取り巻く環境にも目を向けることによって、社会が抱える問題にも向き合い、その解決策を探究する。

1年次の「多文化社会学特論Ⅰ」及び「多文化社会学特論Ⅱ」において、俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」及び「問題解決に向けた多様な解を提示する力」について、高度に基盤的な力を修得する。

また、「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」及び「研究指導」において、言語研究系の方法論を学び、「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「問題本質を見極める力」を身につける。具体的には、主指導教員は英語学（特に動詞意味論）、応用言語学の観点から指導を行い、副指導教員1はコミュニケーションについて語用論、談話分析の観点から指導を行い、副指導教員2は意識と言語の関連を社会言語学の観点から指導を行う。

なお、本モデルにおける研究指導チームは言語学を専門とする教員のみで構成されているが、副指導教員2はドイツにおけるトルコ系移民や、トルコにおけるクルド人問題を取り上げ、社会的葛藤過程と言語行為との関係を、言語の社会記憶建設様式と迫害犠牲者の自己保存戦術に着目して、記憶と記憶に関連する現象の文脈から研究している点で他の教員と異なる性格を有していることから、本研究科博士後期課程においては、言語研究系ではなく社会文化研究系の教員として研究指導に携わることで学際性を担保している。

1年次前期「多文化社会学特別演習Ⅰ」（演習科目）2単位

1年次後期「多文化社会学特別演習Ⅱ」（演習科目）2単位

俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、「社会文化研究系」、「言語研究系」及び「環境日本長崎学・アジア研究系」の研究領域を中心に、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」の基盤を形成するとともに、その枠組みにもとづき俯瞰的な観点から自身の専門分野における研究成果をまとめ、超域的な議論を実施することができる能力を身につける。

<履修モデル例③> 環海日本長崎学・アジア研究系

養成する人材 研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。）、グローバルに展開する企業、国際機関、社会人の学びなおし
※ 以下のモデル例は、アジア研究・ジャパノロジーを専門とする研究者のケース

博士論文題目「中国・ミャンマー・タイの雲南ムスリムと日本におけるムスリムにみる共生の作法——21世紀グローバル世界の問題本質として」

3年次通年「研究指導」（研究指導科目）4単位

「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ、その成果を更に発展させていくなかで、**博士（学術）の学位に相応しい論点、方法、分析、考察、論証を有した博士論文を作成し、ディプロマポリシーに定める「日本・長崎の視点から、21世紀の人文社会科学の土台となる新たな自己—他者関係を構築するアジア研究」を通して多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力を獲得する。**

2年次通年「研究演習Ⅱ」（演習科目）4単位

「研究演習Ⅰ」の成果を継承し、更に発展させていくなかで、**主指導教員及び副指導教員からの指導を通じて、「多文化社会的状況」における「問題本質を見極める力」のなお一層の高度化を図りつつ、各自の研究を更に進めていく。**

具体的には、「研究演習Ⅰ」と同様に(1)～(4)を行い、(5)研究成果を「研究成果報告書Ⅱ」にまとめて提出する。なお、学生の研究計画の見直し等により、研究テーマの変更が生じた場合は、適宜研究指導チーム体制の見直しを実施する。

1年次通年「研究演習Ⅰ」（演習科目）4単位

「環海日本長崎学・アジア研究系」の観点から研究課題にアプローチし、主指導教員及び副指導教員の指導の下、21世紀の「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「**問題本質を見極める力**」を養うなかで、持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し、それに基づき研究を実施。

研究指導チームは、主指導教員と副指導教員2名の計3名からなり、副指導教員のうち少なくとも1名を「環海日本長崎学・アジア研究系」とは異なる系から選出することで、多文化社会学研究に相応しい学際性を担保。

具体的には、次の(1)～(5)の指導を行う。

- (1)研究指導チームの指導のもと、研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法を明確にしつつ、研究計画書を作成
- (2)研究計画に基づき、各自の研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法の深化に繰り返し取り組む
- (3)研究課題の遂行に必要な資料やデータの収集、分析、考察を行う
- (4)研究指導チームの教員に加えて、研究科に所属する他の教員や院生、国内外の包括連携機関の学外アドバイザーが参加する学年末の合同中間発表会で、研究計画及び進捗状況を報告し議論を行う
- (5)研究成果を「研究成果報告書Ⅰ」にまとめて提出する

【研究指導チーム】

主指導教員：環海日本長崎学・アジア研究系（アジア社会論）
副指導教員1：環海日本長崎学・アジア研究系（東南アジア地域研究）
副指導教員2：公共政策研究系（移民政策）

【研究の概要】

今日、世界人口の4割をイスラーム教徒が占めている。信仰や民族を異にする人びととの共生は、21世紀グローバル社会の本質的な問題である。イスラーム教徒はいかなる共生の作法を実践しているのか。また、そうした作法が機能的等価性をもって、他の文脈においても問題解決の道筋を示しうるためには、どのような条件が必要なのだろうか。**中国雲南回族を事例に取り上げ、共生の作法に関する目的と手段を明らかにし、日本におけるムスリムに対してその文脈を越えた適用可能性を明らかにする。**

1年次の「多文化社会学特論Ⅰ」及び「多文化社会学特論Ⅱ」において、俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」及び「問題解決に向けた多様な解を提示する力」について、高度に基盤的な力を修得する。

また、「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」及び「研究指導」において、**環海日本長崎学・アジア研究系の方法論**を学び、「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「**問題本質を見極める力**」を身につける。具体的には、**主指導教員は東アジアにおけるムスリムの共生の実態と課題についての指導を行い、副指導教員1は東南アジアにおけるムスリムの共生の実態と課題について指導を行い、副指導教員2は社会におけるムスリムの移動と教育・家族・地域の問題についての指導を行う。**更に、中国雲南回族の生成と発展に関する史料を東洋文庫や歴史民俗博物館でも閲覧・収集するとともに、東洋文庫及び歴史民俗博物館の学外アドバイザーとのディスカッションを通じて史料批判を行う。更に、**2, 3年次夏季休暇中に、博士論文作成に必要な現地資料を中国・ミャンマー・タイなどでの海外フィールドワークを通じて収集する。**

1年次前期「多文化社会学特別演習Ⅰ」（演習科目）2単位

1年次後期「多文化社会学特別演習Ⅱ」（演習科目）2単位

俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、「**社会文化研究系**」、「**言語研究系**」及び「**環海日本長崎学・アジア研究系**」の研究領域を中心に、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「**問題本質を見極める力**」の基盤を形成するとともに、その枠組みにもとづき俯瞰的な観点から自身の専門分野における研究成果をまとめ、超域的な議論を実施することができる能力を身につける。

<履修モデル例④> 公共政策研究系

養成する人材 研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。）、グローバルに展開する企業、国際機関、社会人の学びなおし
※ 以下のモデル例は、社会人の学びなおし（マスコミ関係）のケース

博士論文題目「国際理論からみる東アジア地域秩序——多様なアクターの参画を通じた地域紛争解決に向けた試み」

3年次通年「研究指導」（研究指導科目）4単位

「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ、その成果を更に発展させていくなかで、**博士（学術）の学位に相応しい論点、方法、分析、考察、論証を有した博士論文を作成し、ディプロマポリシーに定める「グローバルな公共的価値を形成する公共政策研究」を通して多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力を獲得する。**

2年次通年「研究演習Ⅱ」（演習科目）4単位

「研究演習Ⅰ」の成果を継承し、更に発展させていくなかで、**主指導教員及び副指導教員からの指導を通じて、「多文化社会的状況」における「問題解決に向けた多様な解を提示する力」のなお一層の高度化を図りつつ、各自の研究を更に進めていく。**

具体的には、「研究演習Ⅰ」と同様に(1)～(4)を行い、(5)研究成果を「研究成果報告書Ⅱ」にまとめて提出する。なお、学生の研究計画の見直し等により、研究テーマの変更が生じた場合は、適宜研究指導チーム体制の見直しを実施する。

1年次通年「研究演習Ⅰ」（演習科目）4単位

「公共政策研究系」の観点から研究課題にアプローチし、主指導教員及び副指導教員の指導の下、21世紀の「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「**問題解決に向けた多様な解を提示する力**」を養うなかで、持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し、それに基づき研究を実施。

研究指導チームは、主指導教員と副指導教員2名の計3名からなり、副指導教員のうち少なくとも1名を「公共政策研究系」とは異なる系から選出することで、多文化社会学研究に相応しい学際性を担保。

具体的には、次の(1)～(5)の指導を行う。

- (1)研究指導チームの指導のもと、研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法を明確にしつつ、研究計画書を作成
- (2)研究計画に基づき、各自の研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法の深化に繰り返し取り組む
- (3)研究課題の遂行に必要な資料やデータの収集、分析、考察を行う
- (4)研究指導チームの教員に加えて、研究科に所属する他の教員や院生、国内外の包括連携機関の学外アドバイザーが参加する学年末の合同中間発表会で、研究計画及び進捗状況を報告し議論を行う
- (5)研究成果を「研究成果報告書Ⅰ」にまとめて提出する

【研究指導チーム】

主指導教員：公共政策研究系（国際政治学）

副指導教員1：社会文化研究系（現代哲学）

副指導教員2：核兵器廃絶・平和学系（比較政治学）

【研究の概要】

東アジアの国際関係と地域秩序の変動にアプローチするため、**既存の国際理論を存在論・認識論のレベルから再考することにより、固有の地域性とアジアの経験から導かれる普遍性の双方を厳密に議論する。**超越論的・科学的思考だけに根拠づけられた近代進歩主義が限界を迎えるなか、国際政治学を核にした学際的な見地から、過去から現在に至る東アジアの歴史的な連続性と非連続性について考察し、生活世界的な思考をも取り入れた新たな政策構想のために必要な専門的知識の醸成を図る。

1年次の「多文化社会学特論Ⅰ」及び「多文化社会学特論Ⅱ」において、俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越な「問題本質を見極める力」及び「問題解決に向けた多様な解を提示する力」について、高度に基盤的な力を修得する。また、「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」及び「研究指導」において、**公共政策研究系の方法論**を学び、「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「**問題解決に向けた多様な解を提示する力**」を身につける。

具体的には、**主指導教員は国際関係論に基づく課題解決型のジャーナリズム養成のために国際公共政策の課題設定と設計について国際政治学の観点から指導を行い、副指導教員1は実践哲学の観点から政策過程における多様なアクターについて指導を行い、副指導教員2は地域紛争論の観点からグローバルな公共的価値の創生について指導を行う。**更に、ヨーロッパとアジアとの比較の視点から、地域秩序の構築に関して学外アドバイザー（ライデン大学）とディスカッションを行う。

1年次前期「多文化社会学特別演習Ⅰ」（演習科目）2単位

1年次後期「多文化社会学特別演習Ⅱ」（演習科目）2単位

俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、「**社会文化研究系**」、「**言語研究系**」及び「**環海日本長崎学・アジア研究系**」の研究領域を中心に、21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越な「**問題本質を見極める力**」の基盤を形成するとともに、その枠組みにもとづき俯瞰的な観点から自身の専門分野における研究成果をまとめ、超域的な議論を実施することができる能力を身につける。

<履修モデル例⑤> 核兵器廃絶・平和学系

養成する人材 研究者（留学生の母国の大学や研究機関を含む。）、グローバルに展開する企業、国際機関、社会人の学びなおし
※ 以下のモデル例は、国際機関での勤務のケース

博士論文題目「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ——人間の安全保障の確立に向けて」

3年次通年「研究指導」（研究指導科目）4単位

「研究演習Ⅰ」及び「研究演習Ⅱ」で取り組んだ内容を踏まえ、その成果を更に発展させていくなかで、**博士（学術）の学位に相応しい論点、方法、分析、考察、論証を有した博士論文を作成し、ディプロマポリシーに定める「核兵器廃絶の推進に寄与する平和に関する理論的及び実践的研究」を通して多文化社会学に関する高度に専門的な知識と独創的な能力を獲得する**

【研究指導チーム】

主指導教員：核兵器廃絶・平和学系（核抑止）

副指導教員1：核兵器廃絶・平和学系（エネルギー・環境）

副指導教員2：公共政策研究系（東アジア国際関係）

【研究の概要】

北東アジア非核化に密接に関係したいいくつかの懸案の同時解決を図る上で、「**北東アジア非核化への包括的枠組み協定**」の締結に向けた課題と展望を明らかにする。すなわち、（1）朝鮮戦争の戦争状態の終結を宣言し、締約国の相互不可侵・友好・主権平等などを規定する宣言的条項の制定のための条件、（2）エネルギー資源へのアクセスにおける平等の権利と平和利用のための条件、（3）北東アジア非核兵器地帯を設置するために必要な実務的条約締結のための条件、（4）協定の確実な履行を保証し、地域の他の安全保障諸課題の協議にも開かれた常設の地域安全保障協議会を設置するための条件について、国際情勢の分析を踏まえつつ、明らかにする。

1年次の「多文化社会学特論Ⅰ」及び「多文化社会学特論Ⅱ」において、俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、**21世紀社会の「多文化社会的状況」に対する独創的で卓越的な「問題本質を見極める力」及び「問題解決に向けた多様な解を提示する力」**について、高度に基盤的な力を修得する。

また、「研究演習Ⅰ」、「研究演習Ⅱ」及び「研究指導」において、**核兵器廃絶・平和学系の方法論**を学び、「多文化社会的状況」におけるより一層高度な「**問題解決に向けた多様な解を提示する力**」を身につける。具体的には、**主指導教員は軍備管理条約に基づく核廃絶に向けた取り組みについて指導を行い、副指導教員1はエネルギー資源への平等なアクセスを通じた安全保障の確立について指導を行い、副指導教員2は北東アジアの安全保障について人間の安全保障の観点から指導を行う。更に、核関連及び平和構築に関わる国際機関・国際NGO等にて、2、3年次夏季休暇中にインターンシップを行うと共に、国際基督教大学（学外アドバイザー）と北東アジアの安全保障体制に関するディスカッションを行う。**

2年次通年「研究演習Ⅱ」（演習科目）4単位

「研究演習Ⅰ」の成果を継承し、更に発展させていくなかで主指導教員及び副指導教員からの指導を通じて、「**多文化社会的状況における「問題解決に向けた多様な解を提示する力」のなお一層の高度化を図りつつ、各自の研究を更に進めていく**

具体的には、「研究演習Ⅰ」と同様に（1）～（4）を行い、（5）研究成果を「研究成果報告書Ⅱ」にまとめて提出する。なお、学生の研究計画の見直し等により、研究テーマの変更が生じた場合は、適宜研究指導チーム体制の見直しを実施する。

1年次通年「研究演習Ⅰ」（演習科目）4単位

「核兵器廃絶・平和学系」の観点から研究課題にアプローチし、主指導教員及び副指導教員の指導の下、21世紀の「**多文化社会的状況**」におけるより一層高度な「**問題解決に向けた多様な解を提示する力**」を養うなかで、持続可能な社会の構築に資する質の高い研究計画を立案し、それに基づき研究を実施。

研究指導チームは、主指導教員と副指導教員2名の計3名からなり、副指導教員のうち少なくとも1名を「核兵器廃絶・平和学系」とは異なる系から選出することで、多文化社会学研究に相応しい学際性を担保。

具体的には、次の（1）～（5）の指導を行う。

- （1）研究指導チームの指導のもと、研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法を明確にしつつ、研究計画書を作成
- （2）研究計画に基づき、各自の研究テーマに関連した先行研究を収集し、その読解及び批判的検討を通じて、研究の目的、意義、方法の深化に繰り返し取り組む
- （3）研究課題の遂行に必要な資料やデータの収集、分析、考察を行う
- （4）研究指導チームの教員に加えて、研究科に所属する他の教員や院生、国内外の包括連携機関の学外アドバイザーが参加する学年末の合同中間発表会で、研究計画及び進捗状況を報告し議論を行う
- （5）研究成果を「研究成果報告書Ⅰ」にまとめて提出する

1年次前期「多文化社会学特別演習Ⅰ」（演習科目）2単位

1年次後期「多文化社会学特別演習Ⅱ」（演習科目）2単位

俯瞰的かつ超域的な新しい〈知〉としての多文化社会学において、「**社会文化研究系**」、「**言語研究系**」及び「**環海日本長崎学・アジア研究系**」の研究領域を中心に、21世紀社会の「**多文化社会的状況**」に対する独創的で卓越的な「**問題本質を見極める力**」の基盤を形成するとともに、その枠組みにもとづき俯瞰的な観点から自身の専門分野における研究成果をまとめ、超域的な議論を実施することができる能力を身につける。